

フィンランド・アーティストスタジオ財団とYoukobo Art Spaceによる共同企画による日本・フィンランドのアーティスト相互交換プログラムに採択され、2019年5月から6月の2カ間フィンランドに滞在し活動する機会を得る。私は写真の身体行為から得た経験や考察を軸に、多方面に構築した探求行為を通して「生のかたち」の探求を行ってきた。そこで今回のレジデンス・プログラムでは、自然と人間に加えテクノロジーとの関わりから、生のあり方を問い直すことを滞在目的とした。

2019年5月6日（月）の正午前、タピオラに到着する。タピオラはヘルシンキの西方10kmのエスポー市に位置し、戦後復興期の1952年より、住宅を従にし、自然を主として実験的に建設された田園都市である。テクノロジーが人間と自然を繋ぐ役割を担い、驚くほどに無駄のない生活環境が整っている。アトリエから駅までバスまたは徒歩で行き、そこから地下鉄に乗り換えヘルシンキまで移動する。完成したばかりのタピオラの地下鉄の駅に、改札口や駅員の姿はない。庭、公園などの境や敷居がなく地面と一体化しているため、歩いていると知らずとこの間を横断しており、森とその他から形成される迷彩柄そのものと言っても良いだろう。大きな手のひらの上、あるいは柔らかい肉球ともいうべきなのか、地面から伝わる感触はとて柔らかい。市バスの乗車に関しては、車内に降りる人がいない限りバス停に止まらないため、バス停で手を上げて乗車する意思を伝える必要がある。フィンランドの人口は550万人と東京の半分程、エスポー市は22万人と人口は少ない。地下鉄やバスの車内で大きな声で話す人もいないため、ヘルシンキの中心部以外はとにかく静かなのだ。そして興味深いのは、年齢に関係なく連絡がメールや、SNSメッセージではなく電話がかかってくる事である。理由は、それが目的にあった一番早くて確実な手段だという事につける。これらがあらゆる生活場面において、フィンランドの基本構造を形成していると考えた。

森に囲まれたタピオラスタジオで隣に住むペインターのAnneは、TiukuとLeonという名の大きなジャーマンシェパード、ハスキー 犬と一緒に住んでいる。ラップランド地方出身の彼女は7年前に越してきたという。ある日の午前中、普通の犬の10倍ほどの獣臭がするAnneの車に乗り込み、ヘルシンキの東に30kmの場所にある森について行く。犬を放し飼いにできる森-Östersundomin koirametsäで、犬たちを2時間ほど放ち、私たち人間も彼らを追って森に入って行く。野生のブルベリーや、きのこの見分け方を教えてもらいながら、鳥の話、ラップランドでソリを引いていた話や、犬たちが狼や熊から守ってくれた話を聞いていると、池に飛び込み泥まみれの彼らの後ろ姿が何倍にも頼もしく思えてくるのだ。石器時代から馬よりも前にこの地の人間と生きてきたという犬は、ペットではなく人間と共に生きている。その帰りにショッピングセンターに寄ると言うので、しばらく車で走ると、IKEAが見えてきた。店はこの裏にあるというのだが、その裏側になかなか辿り着けない。何度か同じ道を回りIKEAの看板が見える道に3度目に出た時は、二人とも笑わずにはいられなかった。山を颯爽と駆け上って行くAnnaが、高速道路は同じ道を何度も間違えて曲がってしまう。2時間くらい毎回ぐるぐるしてしまうのだ、と運転中に笑いながら話をしているので、緊張感を絶やすことなく助手席に座っていた。そうしてやっとスタジオに戻ったのは、夕方5時頃だったかは定かではない。

長い歴史の中で、人類は絶滅の危機や多くの死を克服し、それぞれの環境に適応しながら生き延びてきたわけである。さらに地理的環境や歴史からみても恵まれているとは言えないフィンランドは、死ぬか働くかという選択肢のない環境で生きてきた場所なのだ。フィンランド人の平等への考えは、決して高等な文化から生まれた綺麗事ではなく、男女関係なく動けるものが動くという貧しさから生まれている。70%が森林というこの土地の寒さや厳しさから形成されてきた民族性、人々の行動は最小限であり無駄がない。控えめなコミュニケーションも、その条件の上で成り立っていると言えよう。滞在中にあらゆる生活場面で出くわす合理性を解体してみても

と、それは全て生きる上で必要最低限な物事のみが残り、そうでないものが削ぎ落とされている。そうして余分な部分が全て削ぎ落とされた地は、静寂さに象徴されるのかもしれない。少なくとも今を生きる我々は、この身体に備わった機能だけで生きなければならぬ。その上で優先すべきことを精査し直すべきであるということ。フィンランドにおいて静寂さとはDNAに刻み込まれた森との繋がりであり、合理性は先祖から受け継がれた生存するための情報なのだろう。あらゆるシンプルさを体験することで、世界という曖昧さは想像であり、単に複雑さに毒されていると再認識するのである。今回タピオラスタジオでのオープンスタジオの機会を設けず、自身が展覧会、オープニング、他のレジデンス・プログラムのオープンスタジオ、トークイベント、アーティストのスタジオ訪問や大学訪問などを行った。そういった交流や日常のコミュニケーションを通して、フィンランド人は信頼できる存在であり、互いに学び合える関係を築くことができると確信したこともまた大きな収穫ではないだろうか。

最後にFAFSのRiikka氏、タピオラスタジオのアーティストや大学関係者の方々などの協力のもと現地でも多くの出会いを得られたこと、そして何よりこのような機会を提供して頂いた遊工房アートスペース、フィンランド・アーティストスタジオ財団、日本フィンランドセンターの皆様に心から感謝申し上げます。